

令和7年度第1回青森県青少年健全育成審議会 事前提出質問及びその回答

資料7

No.	資料 番号	該当 箇所	質問者	質 問	回 答
1	資料 1-1	P1 II-4-10	田 中 委 員	本県における不登校の発生件数 →発生件数が令和4年からぐんぐんが増えてきたのは、なぜなのでしょう。	本件指標は、毎年度文部科学省が行っている「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」の結果です。 この結果について、文部科学省は、小中学校では「増加の背景として、児童生徒の休養の必要性を明示した『義務教育の段階における普通教育に相当する教育の機会の確保等に関する法律』の趣旨の浸透等による保護者の学校に対する意識の変化、コロナ禍の影響による登校意欲の低下、特別な配慮を必要とする児童生徒に対する早期からの適切な指導や必要な支援に課題があったことなどが考えられる。」と分析しており、また、高等学校では「増加の背景として、高等学校進学やクラス替え等に伴う不適応の増加やコロナ禍の影響による登校意欲の低下などが考えられる。」と分析しています。 これらの分析については、県教育委員会においても「本県においても同様に考えることができると捉えている。」と言及しています。
2	資料4	P1 調査結果の主なポイント 上から5つ目	田 中 委 員	地域への愛着と定住意向の関係について分析したところ、地域の大人からあいさつされている青少年は高い割合で愛着や定住意向を示している傾向があった。（詳細は報告書参照） →報告書のどこに地域の大人の挨拶と青少年の愛着と定住意向との関連性を示す内容があるのですか。	「青少年の意識に関する調査」結果報告書のP127～129が該当の言及箇所です（該当箇所の写しを添付） なお、この分析に係る元の質問は報告書P9のQ3及びP21のQ9で、これらをクロス集計したものが上記に掲載されたグラフとなっています。

(写)

青少年の定住意向とコミュニケーション ー令和6年度「青少年の意識に関する調査」の分析からー

弘前大学人文社会科学部 教授 羽渕一代
早稲田大学人間科学研究科 博士後期課程 中田直子

1 はじめに

子どもや青少年を取り巻く社会は常に変化しています。近年では、新しいSNSの登場や生成人工知能の発達等によるネット社会や技術革新の急速な変化の影響を受けて、私たちの暮らしやコミュニケーション、働き方、学び方も変わり続けています。

日常生活では、新型コロナウイルス感染症流行下におけるさまざまな感染症拡大防止のための要請が解除されて1年以上が経過し、対面的コミュニケーションが可能な生活が回復しました。地域ではお祭りやスポーツイベントなどの行事も行われています。他方、感染症対策として導入されたリモートワークやオンライン教育に加えて、これらを支えるデジタルツールとテクノロジーは、現在の私たちの生活に溶け込んでいます。

本調査は、このように変化が著しく将来の予測が難しいとされる社会環境のなかで、これからの時代を生きる青森県の青少年の地域・家庭・学校での生活に対する意識や行動を把握することを目的に実施されています。これら地域・家庭・学校は対面的コミュニケーションを中心とする社会（集団）です。本分析では、このコミュニケーション空間へのかかわりと青森県が基本計画でめざす「若者が、未来を自由に描き、実現できる社会」と関連する青少年の定住意向について確認していきます。

2 地域に対する意識と定住意向

今回の調査でも、多くの児童・生徒が住んでいる地域に愛着をもっているという結果が得られました。住んでいる地域が好きかきらいかという設問に対し、「好き」「どちらかというところ好き」と回答した人の割合は高く、小学生で94.1%、中学生で93.8%、高校生で87.5%という結果でした。一方、小学校、中学校、高等学校と学校段階が上がるにつれて地元を好きだと回答するポイントは低下しています。この理由には、自分が住んでいる地域を好きだと認識しつつも、成長する過程で、自分自身の将来像を考えたり、身の回りにある障壁に気づいたりしながら、地元に対する認識を変化させていることが考えられます。

また、住んでいる地域に愛着をもつ青少年が、学校卒業後にも地域に住み続けたい（定住意向がある）と回答する傾向があるとわかりました。グラフには示していませんが、学校を卒業してからも地域に住み続けたいかという設問に対し、「住み続けたい」「まあ住み続けたい」と回答した人の割合は、中学生で77.0%、高校生で55.1%であり、半数以上の児童・生徒が、現在住んでいる地域に住み続けたいと回答しています。さらに、住んでいる地域を「好き」（「好き」＋「どちらかというところ好き」）と回答し、地域に住み続けたい（「住み続けたい」「まあ住み続けたい」）と回答した人の割合は、学級段階ごとの回答者の全体に対し、小学生で76.0%、中学生で75.2%、高校生で53.5%でした。一方、住んでいる地

域が「きらい」（「どちらかといえばきらい」＋「きらい」）と回答し、地域に「住み続けたくない」（「あまり住み続けたくない」＋「住み続けたくない」）と回答した人の割合は、学校段階ごとの回答者の全体に対し、中学生で4.9%、高校生で9.4%でした。

地域に愛着をもつ人や、定住意向のある人にはどのような傾向があるのでしょうか。愛着や意向といった意識は現実の定住に関わる規定要因ではありませんが、地域を好ましく思う気持ちと定住したいという意識どうしには関連があります。ここからは何が青少年の定住意向に関係しているのか詳しくみていきます。

3 定住意向とコミュニケーション

（1）地域の大人からのあいさつ

まず、青少年の地域への愛着や定住意向は、住んでいる地域でのコミュニケーションの状況と関連があることがわかりました。グラフには示していませんが、住んでいる地域が「好き」（「好き」＋「どちらかといえば好き」）と回答した青少年のうち、地域の大人にあいさつ「されている」という設問に対し、あいさつされている（「いつもされている」＋「ときどきされている」）と回答した人の割合は、小学生83.6%、中学生72.3%、高校生65.1%でした。地域の大人からあいさつされている青少年は地域への愛着があるようです。

この関連と同様に、定住意向も地域の大人からのあいさつと関連がみられました。小学生段階でははっきりとした関連はありませんが（図1）、中学生と高校生の定住意向には明確な関連がありました。地域の大人からあいさつされている中学生の約8割が定住意向を示しており（図2）、高校生でも約6割が定住意向を示しています（図3）。地域への愛着や定住意向は、地域の大人からあいさつされていると認識している人のほうが強いようです。住んでいる地域におけるあいさつなどのコミュニケーションによって、日常的に大人たちに受容されているという感覚が、青少年の定住意向に影響している可能性があります。

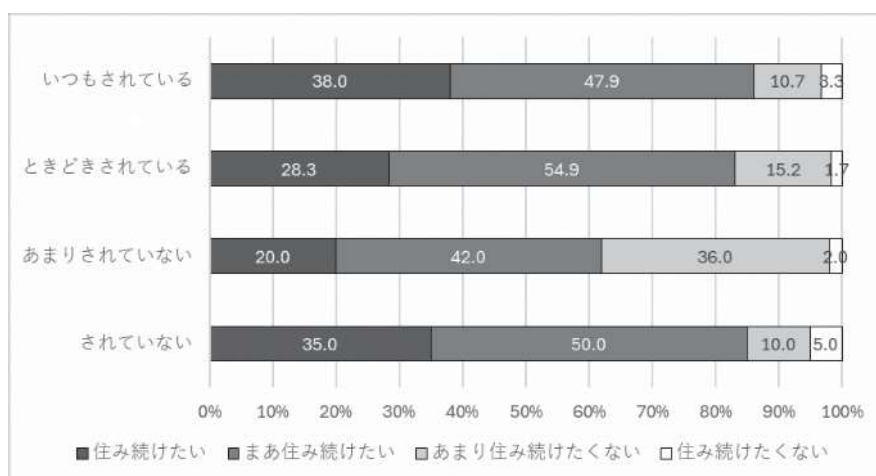


図1「地域の大人からあいさつされているかどうか」と「定住意向」(小学生)

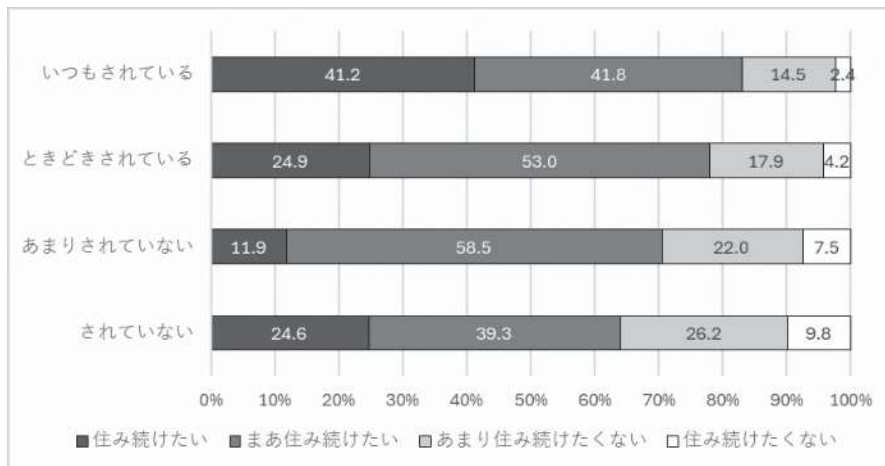


図2「地域の大人からあいさつされているかどうか」と「定住意向」(中学生)

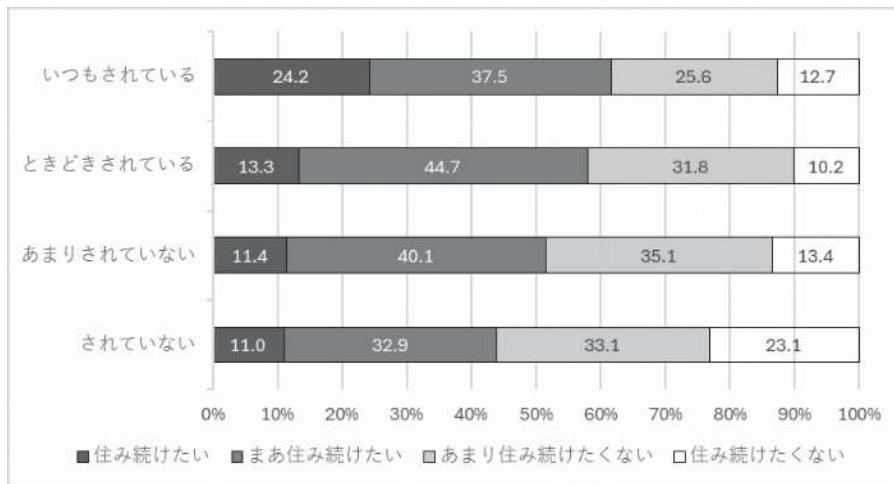


図3「地域の大人からあいさつされているかどうか」と「定住意向」(高校生)

(2) 地域活動への参加

次に、地域とのかかわりという観点から、過去1年に地域活動に参加した人の定住意向をみてみましょう。地域活動に参加する青少年の定住意向を示す結果です(図4、図5)。定住意向のある中学生の割合は、地域活動に参加したことがない人で76.5%、公民館などの催し物に参加した人で88.7%となっています。定住意向のある高校生の割合は、地域活動に参加したことがない人で54.6%、子供会や町内会の行事に参加した人で62.5%となっています。地域活動も定住意向と関連しています。

同様に、過去1年間に地域活動に参加した青少年の地域への愛着について確認しましょう。一般的に、地域への愛着が高い人が地域活動に参加する傾向があるといわれています。本調査の結果でも、地域活動に参加した青少年の9割以上が住んでいる地域に愛着をもっています(図6、図7、図8)。とくに高校生では関連が強くみられます。地域活動への参加も、地域の人々と交流したり地域に対する理解を深めたりするコミュニケーションであり、青少年の定住意向と関連があります。